

## 日韓の大学生による海外教育実習プログラム I-STEP と参加学生の意識調査

全 炳 徳\* 下 田 杏 奈\*

### I-STEP (International Student Teaching Education Program) with Japan and Korea college students and their attitude survey by using questionnaire research

Byungdug JUN Anna SHIMODA

#### Abstract

In recent years, among Japan and Korea universities, there are many curriculum-based training over the dimension of human or research exchanges. I-STEP (International Student Teaching Education Program) carried out between Nagasaki University of Japan and Hanyang University of Korea that is a major example program with curriculum-based exchanges.

This I-STEP started in July, 2004. It is 10th anniversary this year, 2013. This program is a core subject of the elementary education course, the faculty of education, Nagasaki University. Among enrolled students, it is one of the popular curriculum. This report explains the outline and history of this curriculum, I-STEP. Moreover, the results of a questionnaire survey which the participating college student carried out are analyzed and reported.

#### 1. はじめに

近年、日韓の大学間では人的交流や研究交流の次元を超え、学部課程や大学院課程に組み込まれた「カリキュラム化」しつつある。長崎大学と韓国の漢陽大学校との間で実施されている I-STEP (International Student Teaching Education Program、教員養成系大学の海外教育実習プログラム) はその一例である。I-STEP が実施されたのは 2004 年 7 月からであり、2013 年には 10 回目を迎えることになる。本プログラムは長崎大学教育学部の必修科目 (小学校教育コース・多文化理解実践専攻) として位置づけられており、在学生たちの間では人気の高いカリキュラムの一つでもある。

本報告では「海外教育実習プログラム I-STEP」の概略を説明するとともに、毎年実施してきた参加大学生の意識調査の結果、更には第 9 回目に実施した、学生主導の意識調査をまとめ、その変遷を考察した。

---

\*長崎大学教育学部

## 2. 海外教育実習プログラム I-STEP の変遷<sup>1, 2)</sup>

2003 年 10 月、長崎大学と韓国・漢陽大学校との大学間交流協定が締結され、2004 年 7 月 1 日から 10 日までの間、第 1 回目の I-STEP が長崎大学で開催された。当時はまだ、交流プログラムの名称が決まっておらず、次の年の 2005 年の韓国・ソウルで開催された第 2 回目のプログラムから I-STEP という名称が使用された<sup>3)</sup>。その後、隔年ごとに日韓で開催された I-STEP は今年の 2012 年、長崎大学での開催を持って 9 回目（6 月 30 日～7 月 9 日）を実施した。そのプログラムの内容を第 1 回目と第 9 回目を比較してみると表 1 のとおりになる。

表 1 実施講義内容と担当教員の変遷

No.	2004 年度実施内容（1 回目）		2012 年度実施内容（9 回目）	
	講 義 内 容	担 当 者	講 義 内 容	担 当 者
1	長崎と原爆	舟越耿一	多文化理解教育	楠山 研
2	長崎とキリスト教	高橋眞司	長崎と平和教育	全 炳徳
3	長崎県の地方教育行政	山口耕成	授業参観	
4	アジアと日本	谷川昌幸	授業案作成と実習Ⅰ	
5	ICT 活用教育	全 炳徳	授業案作成と実習Ⅱ	
6	教育実習講義とビデオ	橋本健夫	授業案作成と実習Ⅲ	

表 1 から見て取れるように、本プログラムの内容は講義中心から教育実習中心の内容に変遷していることが分かる。国際理解をテーマとしたエクスポージャー型授業を実施した初期に比べると、予備教師の海外での教育実習の色が濃くなっている。特に、授業案作成と実習は本プログラムの主な内容として定着していることが分かる。このことから、本プログラムが教員養成系大学の海外教育実習プログラムとして定着していることが分かる。第 1 回目は学校現場の見学で済まされたものが、第 9 回目になると受講生自らが授業づくりから学校現場（小学校と中学校）での教育実習までを主導的に行っており、海外での教育現場を実体験できるプログラムとして成長していることが分かる。ちなみに、学生主導の授業づくりや学校現場での実習プログラムが導入されたのは、2006 年 7 月 1 日から 10 日までに開催された第 3 回目の I-STEP からである<sup>4)</sup>。

## 3. I-STEP 恒例のアンケート調査結果とその変遷

本プログラムでは毎年、おおむね 19 項目のほぼ同じ内容のアンケート調査を実施してきた。アンケートの内容はプログラムの内容や講義等に点数（大変良かった：3 点、良かった：2 点、良くなかった：1 点、大変悪かった：0 点）をつけ、それぞれの項目ごと 3 点満点として採点した。毎年、プログラムや講義などが変わることから、質問項目は若干異なるものの、全体的に見れば 5 項目に大別できる。第 1 回目と第 9 回目のアンケート調査の比較結果を 5 項目に分けて整理したのが表 2 である。

表2 アンケート質問項目とその結果

質問項目と質問内容		2004年（3点満点）	2012年（3点満点）
第一項目	講義内容に関する質問	1.9（7個の質問平均）	2.7（2個の質問平均）
第二項目	多文化見学・現地視察に関する質問	2.1（3個の質問平均）	2.6（3個の質問平均）
第三項目	学校の授業見学・参観等に関する質問	1.7（3個の質問平均）	2.9（2個の質問平均）
第四項目	授業案作成・海外教育実習に関する質問	（2006年度から実施）	2.7（9個の質問平均）
第五項目	交流会等に関する質問	2.4（6個の質問平均）	2.7（3個の質問平均）
全項目の平均点数		2.0（4項目の平均）	2.7（5項目の平均）

表2の結果からも明らかのように、I-STEP は年を経るごとに学生たちの評価が高く、国際化に向けての教育学部の教育課程として定着していることが分かる。プログラムの内容においても海外での授業案作り、海外教育実習などが盛り込まれ、参加学生から高く評価されている。特に、第三質問項目の「学校の授業見学・参観等に関する質問」は最低評価から最高評価へと変化している。これは第1回目の学校の授業見学・参観では大まかな学校の全体様子を見たのに対して、回数を重ねるにつれて参加学生の興味のある科目を設定して参観していたため、学生たちからは高く評価されたように思われる。ちなみに、表2には示されていないが、2011年のアンケート調査結果<sup>4)</sup>でも、韓国の学校を見学・参観した項目が一番高い点数（満点の3.0）をマークしている。本プログラムに参加する学生たちは、海外の子どもたちの様子を見る授業参観に大変興味を示していることがうかがえる。なお、第1回目では一番高得点をマークしていた第五項目「交流会等に関する質問」が、第9回目では平均点数を示しているのも大きな変遷である。教育学部の学生たちからして海外大学との交流の主な関心事は、授業案作り・海外教育実習、海外の学校現場の見学や参観にあることが見て取れる。

#### 4. 2012年度、学生主体のアンケート調査

本研究の第二著者の下田は、2011年度に開かれた韓国・ソウルでのI-STEPにも参加した。2011年度の報告<sup>5)</sup>では実践授業の小学校・音楽の報告者でもある。下田は2回の参加が義務付けられている2012年度も日本側の参加者として本プログラムに加わった。この間、日韓の両国が音楽や漫画・食文化等、若者を中心として文化的な交流が活発である一方、歴史的・政治的背景から未解決な問題（慰安婦問題、竹島・独島問題、教科書問題など）があることに注目し、2012年度のI-STEP期間中、日本と韓国の参加学生を対象にアンケート調査を実施した。日韓の学生間の交流はこれらの問題にどのような意義を見出すことができるのかをアンケート結果から考察する目的があった。

##### 4.1 アンケート調査方法

本プログラム参加の初日及び最終日に漢陽大学の学生参加者計15名、長崎大学学生参加者計23名を対象に事前・事後アンケートを実施後回収し、集計した。アンケート調査に回答してくれた人は17名で、回収率は45%であった。アンケート調査の内容は大きく「I-STEPについて」「参加国の国・人への印象について」「参加者本人について」「日韓関係について」の4種類に大別される。

## 4.2 アンケート調査結果

### ・ I-STEP について

I-STEP は基本的に複数回参加が義務付けられている。それは受け入れ時には相手国の参加者を面倒見ながら交流を深め、相手国の I-STEP のプログラムに参加することを狙いとしているためである。その意味で、I-STEP への参加者は初めての人が少なく、2 回目の参加者が 70 パーセントを超している（図 1）。I-STEP は一回の行事として終わるプログラムではなく、両国の教育学部の教育課程の一つとして、海外教育実習の一環としての色合いが強いことが分かる。

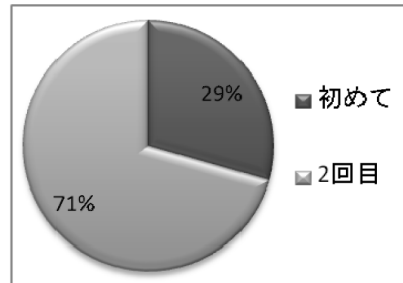
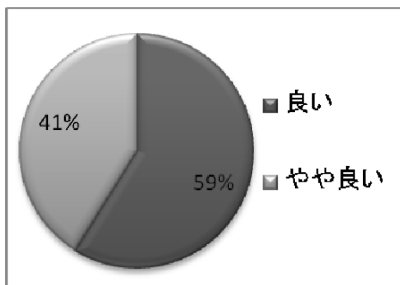


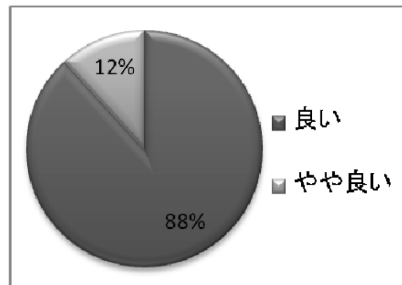
図 1 参加回数の割合

### ・ 参加国の国・人への印象について

日本の学生からして韓国の印象、韓国の学生からして日本の印象はどのような印象を持っているのか。図 2 は、国そのものについての印象について（図 2 (a)）また、人への印象について（図 2 (b)）それぞれの結果を表している。両国の学生たちは国に対する良い印象より、人への良い印象が強いことがうかがえる。



(a) 国への印象



(b) 人への印象

図 2 参加国の国・人への印象についての回答

### ・ 参加者本人について

アンケートでは「あなたは日本（韓国）に興味がありますか。」また、「あなたは今まで、I-STEP 以外に日本人（韓国人）と交流を深めたことがありますか。」との質問項目を設けた。これに対しては参加者からは図 3 (a) と図 3 (b) のような結果を得ることができた。図 3 (a) は参加国への興味関心の度合いであり、本アンケート調査に回答してくれた人の全員から、興味・関心があるとの回答結果があった。更に、回答者の 88% の人たちが既に何度か、相手国の人々との交流を経験していたことが分かる。I-STEP に参加する学生たちはほとんど、両国への興味・関心があり、既に交流の経験を持っている状況であることが見て取れる。

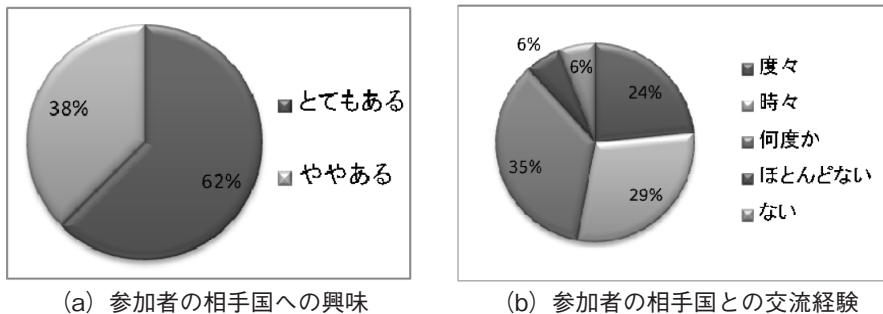


図3 参加者本人の相手国への興味と関心の度合いについての回答

#### ・日韓関係について

日韓関係についてのアンケート調査では、「現在の日韓関係についてどう思うか」について質問し、更に「I-STEP への参加動機、これからの期待等について」書面で記述してもらった。その結果を図4に示す。I-STEP2012に参加した学生たちは、現在の日韓関係について93%の人が普通以上の関係にあるとしている。

しかし、現在の日韓関係が良いとは言えない状況についても記述している。書面での記述で回

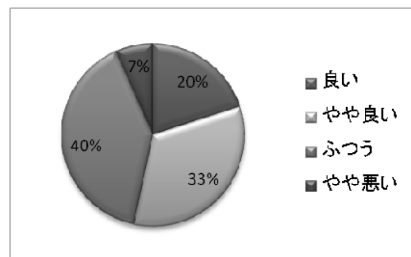


図4 現在の日韓関係についての回答

答を求めた「歴史・政治問題に関する意識」では大きな差が見られた。特に、慰安婦問題、教科書歪曲問題、竹島・独島問題などについての認識度は、韓国側がそれぞれ100%の回答があったのに対して、日本側はどれも100%には及ばず、慰安婦問題に関しては日本側の回答率が韓国側の回答率の半数以下となっていた。差異が明らかなアンケートの設問と、それぞれの記述内容は以下の通りである。

#### ・慰安婦問題について具体的に知っていることを書いてください。

##### 〈日本側学生の意見〉

- ・戦時中に起きた問題。
- ・日本が韓国や中国の女の人を慰安婦としてつかっていたこと。
- ・日本軍が、戦時中、売春を強制したこと。
- ・日本の兵隊が韓国人女性を強姦すること。
- ・多くの日本人女性が犠牲になった。
- ・男性（軍人）の欲を満たすために、若い女性が人として扱われなかったこと。
- ・日本が悪いことをしたこと。

##### 〈韓国側学生の意見〉

- ・日本が朝鮮を支配していた時、日本が若い女性を軍隊につれていき強姦していた。無実の若い少女達を性欲を満たすための奴隷とした。しかし、日本政府はその事に

ついて十分な謝罪をしておらず、女性達は今も悲しんでいる。

- 韓国にとってとても悲しい歴史であり、多くの日本人はこの歴史について知らなければならないと思う。
- 悲しむべき歴史で、女性達は何も知らず、貧しい家族の為に働きたいとだけ思っていたが、性欲を満たすために利用された。
- この問題を解決するために両国政府はなにかする必要がある。
- 慰安婦問題は日本と韓国の問題で、その時何が起きていたのか知り、深くその事について考えなければいけない。

- 教科書歪曲問題について具体的に知っていることを書いてください。

〈日本側学生の意見〉

- 日本の都合の良いように書かれているという事？
- 日本が過去に韓国・中国にしたことをあまり載せていない。
- 事実が正しく書かれていないこと。
- 聞いたことはあるが、上手く説明できない。
- 竹島問題など。
- 授業で聞いたことがある。
- 太平洋戦争や朝鮮戦争などの記述で、日本を肯定的にとらえた言い回しや記述をすること。
- 自分の国に都合の良いことしか書いてない。
- 日本では反日教育というけれど。実際日本も同じ。

〈韓国側学生の意見〉

- 日本と韓国は異なった視点で歴史的事実を捉えている。
- 日本の教科書が日本が犯した罪についての部分を削除した。(戦争によって多くの無実の人々を殺したこと)
- 歴史についての2つの見方。
- 日本人の中には悲しい記憶を韓国人に与えた人がいる。日本はこの悲しい話を教科書から排除するか、ごく一部にしか記載していない。理解はできるが、良くない。
- 私はこれは異なった視点からの記録を取り続けているという問題であると思う。
- 日本政府が歴史教科書に嘘を記載している。

- 竹島・独島問題について具体的に知っていることを書いてください。

〈日本側の学生意見〉

- 韓国では独島と呼ばれている。
- 日韓どちらの領土であるかもめている。ゆずらない。
- 島根県にある竹島の領土問題。
- 日本と韓国間での領土問題。



〈韓国側の学生意見〉

- ・日本と韓国両者とも自国の領域だと考えている。
- ・独島
- ・ほとんどの韓国人が知っており、私達は韓国の島だと思っている。さらに言うとな日本人の中には日本の領土だという人がある。だから問題となった。
- ・日本政府は独島を自国の領土だとみなしている。

以上より本プログラム参加者の書面での回答の特徴的な点として、①日本側の学生から抽象的な内容が多く、詳細までは詳しく述べられていないこと、②自分の意見や立場を曖昧に濁しているような印象を受ける。更に、③詳細までは上手く説明できないが聞いたことがある、程度の認知の枠に収めているようである。一方、韓国側の学生からは、①より具体的な詳細に加え、②自分の意見や主張をはっきりと述べている。「我々の領土である」「嘘である」など断定的な言い方も多く見られる。

さらに、事前アンケートでは、「社会科や日本史で習った韓国の印象は」という質問もした。これに対して、日本側の学生からは全員が「ふつう」と「良い」との選択肢を選んでいる。詳細の記述欄には、「植民地支配など過去の韓国に対する対応は反省すべき点」や「償う点が数多くある」しつつも、「時代の流れや当時を考慮すると、仕方がない点がある」という意見や、「韓国人の反日感情は今でも消えていないのではないかと気がかりである」という意見もあり、個々によって異なった意見を述べている。これに対して、韓国側の学生からは80%以上の学生から「良くない」「あまり良くない」との回答があり、歴史的な教育の観点から見た両国の、相手国に対する意識の差は顕著であることが分かる。具体的な理由として挙げられたのは、「植民地支配の歴史を学んだ影響が大きい」という意見や、「現在の竹島・独島問題においても、侵略国として日本を否定的に認識しているため、前向きに両国の関係を検討していくことができない」などの意見が多く見られた。

以上の意見等を考慮すると、韓国側の学生の中には、日本や日本人に対して少なからず否定的な意識を持っていた者が多い。しかしながら、そのような参加者をも含まれる中、10日間のプログラムの満足度は日本側・韓国側の学生共に100%であり、学生達の意識もこのプログラムを通じて大きく変化していることが容易に把握できる。この数字に表れているように、両国の発展的な関係改善のためにも本プログラムの存在意義は大変大きいと言える。

## 5. おわりに

教員養成系大学の国際教育実習プログラム I-STEP は、2004年7月から日本の長崎大学と韓国の漢陽大学校との間で行われた先駆的な取り組みである。本報告からもわかるように、このプログラムは初期の講義中心から現在の実習中心にカリキュラムの変遷を遂げている。また、海外の学校現場や子どもたちに触れたい教員養成系大学の学生たちにとって満足度の高いプログラムであることが分かる。

更に、2012年度の学生主体のアンケート結果から、多文化共生、異文化理解を目的とする異国間の学生交流の直接的な関わり合いや交流が極めて重要であることが示された。言葉の壁なども相手と時間を共に過ごし、直接関わり合いを持って、積極的に自分の意思を

伝え、また相手の意見を聞き、お互いを理解していくことで、確実に歩み寄っていくことができることを示している。また、日韓関係に関するマスコミの報道や書籍や周囲から入ってくる情報は発信者の意図によって着色されている部分が大きく、受けてきた教育によっても相手に対する認識に大きく影響を与えていることがアンケート調査の結果から読み取れる。

慰安婦問題などを始めとする歴史的な問題の認識は日本側の学生には薄く存在するが、韓国側の学生からしてみれば大変遺憾なこととなっている。竹島・独島問題、教科書歪曲問題など、両国を取り巻く政治的、歴史的問題は非常に根深い。この点における解決的なアプローチはあるのか。よりよい多文化共生のためにはお互いの歴史的・政治的観点を両者の立場から理解し、共有していくことが必要である。若い世代が集まり、同じ空間や場所を共有しながら学ぶという姿勢がもっとも重要であるのではないだろうか。言葉や文化には違いがあろうとも、同世代の友人として良い関係を築くことは大いに可能であるということをも本プログラムのアンケート調査から垣間見ることができる。両国の発展的な関係改善のためには、これからもこのような活動と成果が毎年着実に実行され、多文化理解の実績を残していくべきである。

#### 参考文献

- <sup>1</sup> 国際理解をテーマとした総合的な学習の教育課程編成とそれを支えるデータベース構築（第一報）、平成 16 年度科学研究補助金（基盤研究 C(2)）研究成果報告書、pp.3-4、平成 17 年 3 月、研究代表者：全炳徳（長崎大学教育学部助教授）。
- <sup>2</sup> 長崎大学教育学部、平和と多文化共生に関する教育研究センター、長崎大学教育学部・漢陽大学校師範大学交流プログラム I-STEP 2012 in Nagasaki 報告書、2012 年 9 月
- <sup>3</sup> 長崎大学教育学部、平和と多文化共生に関する教育研究センター、長崎大学教育学部・漢陽大学校師範大学交流プログラム I-STEP 2005 報告書、2006 年 3 月
- <sup>4</sup> 長崎大学教育学部、平和と多文化共生に関する教育研究センター、長崎大学教育学部・漢陽大学校師範大学交流プログラム I-STEP 2006 報告書、2007 年 3 月
- <sup>5</sup> 長崎大学教育学部、平和と多文化共生に関する教育研究センター、長崎大学教育学部・漢陽大学校師範大学交流プログラム I-STEP 2011 in Seoul 報告書、2011 年 11 月